

氏名	山田悠介
学位の種類	博士(異文化コミュニケーション学)
報告番号	甲第459号
学位授与年月日	2017年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日 文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	環境文学の「レトリック」—— 梨木香歩と石牟礼道子の「 反復」
審査委員	(主査) 奥野 克巳 平賀 正子 野田 研一(立教大学名誉教授)

I. 論文の内容の要旨

(1) 論文の構成

目次

図表のリスト.....	I
宣誓書.....	II
第1章 序論.....	1
1.1 研究の概要および目的.....	1
1.2 方法論.....	2
1.3 論文の構成.....	2
第2章 環境文学と「レトリック」.....	4
2.1 エコクリティシズムと環境文学.....	4
2.2 梨木香歩と石牟礼道子の環境文学.....	6
2.3 ことばの〈かたち〉を語ること.....	8
2.3.1 〈かたち〉を読むこと、語ること.....	8
2.3.2 ことばの〈かたち〉が語ること (1) :『鳥と砂漠と湖と』の「反復」.....	13
2.3.3 ことばの〈かたち〉が語ること (2) :『内なる島』の「反復」.....	15
2.4 ことばの〈あや〉と「レトリック」.....	20
2.4.1 ことばの〈あや〉.....	20
2.4.2 「芸術的表現の技術」と「発見的認識の造形」.....	22
2.4.3 20世紀以降のレトリック論.....	23
2.4.4 「対比」という〈あや〉.....	25
2.4.5 「自由と荒野、荒野と自由」のレトリック.....	28
2.5 「弁論術」としての「レトリック」.....	31

2.5.1 「レトリック」の体系化と、衰退する「レトリック」	32
2.5.2 「レトリック批評」	38
2.5.3 スロヴィックの「レトリック」	41
2.6 本研究のアプローチ：「反復」を読み解くこと	44
第3章 「反復」を読み解くために	47
3.1 第3章の概要	47
3.2 「反復」という〈あや〉	47
3.2.1 音の反復	51
3.2.2 語句の反復	52
3.2.3 構成の反復	53
3.3 反復の〈かたち〉と〈意味〉	55
3.3.1 「等価性の原理」	55
3.3.2 『冬虫夏草』『ヤマユリ』の反復	57
3.3.3 「回顧的錯覚」と「反復」	62
3.4 「類像性」	65
3.4.1 類像性の概念	65
3.4.2 反復と類像性	67
3.4.3 「ヤマユリ」における二種類の類像性	69
3.4.4 作品の主題を語るキアスムス	74
3.5 「反復」と「コミュニケーション」：「6機能モデル」	78
3.6 「詩的機能」	80
3.6.1 詩的機能のメカニズム	80
3.6.2 詩的機能を手がかりに——二つの時空——	83
3.6.3 ヴァインリヒの時制論	85
3.6.4 「〈有効性の制限〉」	88
3.6.5 ヤコブソンとヴァインリヒ	91
3.7 「交話的機能」	93
3.8 第3章のまとめ	100

第4章 梨木香歩の「反復」	101
4.1 第4章のねらい	101
4.2 自然から人間への〈言葉〉、死者から生者への〈言葉〉	101
4.2.1 『西の魔女が死んだ』	101
4.2.2 植物たちの〈言葉〉	102
4.2.3 おばあちゃん言葉.....	105
4.2.4 おばあちゃんからの〈言葉〉	107
4.3 人間から自然への言葉 (1) : 『ぐるりのこと』『物語を』の「反復」	111
4.3.1 夢を語る言葉.....	111
4.3.2 夢の反復、反復と夢想.....	116
4.3.3 土地への祈り	118
4.4 人間から自然への言葉 (2) : 『蟹塚縁起』の反復.....	120
4.4.1 『蟹塚縁起』のあらすじ.....	120
4.4.2 「蟹」というモチーフ.....	123
4.4.3 「水平の言語行為」と「垂直の言語行為」	124
4.4.4 人と人ならざる存在の「コミュニケーション」	127
4.5 自然の〈言葉〉を語る〈うた〉(1) : コウノトリの〈言葉〉	129
4.5.1 『エストニア紀行』	130
4.5.2 鳥の〈ふり〉	133
4.5.3 歌を歌うということ.....	134
4.5.4 「主体の二重化」と〈変身〉	136
4.6 自然の〈言葉〉を語る〈うた〉(2) : クビワキンクロの〈言葉〉	139
4.7 「主体の二重化」と交感論.....	145
4.7.1 〈交感〉の概念.....	145
4.7.2 「人間の自然化」	147
4.7.3 「〈見え〉先行方略」	149
4.7.4 相手に「なって」分かること.....	151
4.7.5 「主／客を撚り合わせる」ということ.....	153
4.7.6 「越境する」ということ.....	156
4.8 第4章のまとめ	157

第5章 石牟礼道子の「反復」	159
5.1 第5章のねらい	159
5.2 反復すること、「相手の身になる」こと	161
5.2.1 みっちんとおもかさまのやりとり	161
5.2.2 「相手の身になる」こと、「他者」と交わること	164
5.2.3 「コンスタンチノーブル」と「コン・ツ・タンツ・ノーバ・ロ」	166
5.3 「反復」と交話的機能	168
5.3.1 くり返される「七つの子」	168
5.3.2 くり返される夫の言葉	173
5.4 みっちんの〈変身〉——「反復」の「反復」——	176
5.4.1 みっちんとおぎん女	176
5.4.2 邂逅と〈変身〉	178
5.4.3 「うた状態」と「人間の自然化」	181
5.5 「草のことづて」をめぐる三つのテキスト	183
5.5.1 「草のことづて」	184
5.5.2 「名残りの世」	185
5.5.3 「人間に宿った自然」	188
5.6 「想像的相互行為」の生成と「反復」	191
5.7 第5章のまとめ	195
第6章 結論と今後の展望	197
6.1 結論および本研究の意義	197
6.2 本研究の課題と今後の展望	200
参考文献	203
謝辞	222

(2) 論文の内容要旨

本研究は、人間と自然の関係性を主題とする環境文学作品に看取される、さまざまなレベルの言語上の「反復」の意味と機能の解明を目的とするものである。

近年、「エコクリティシズム」と呼ばれる文学研究のなかで、文学における自然と人間の関係についての研究が行われているが、従来のエコクリティシズムでは、文学の表現形式よりも内容に、「テキスト」よりも「コンテキスト」に目が向けられることが多く、「いかに言われているか」という側面から環境文学作品が考察されることは少ない。

本研究では、言葉の表現形式そのものも意味や機能を持ち、それを「読む」ことが可能であるという立場から、現代日本を代表する環境文学作家である梨木香歩と石牟礼道子の環境文学作品に描かれた、人間と自然および超自然の存在とのあいだの「コミュニケーション」の場面を分析し、テキストの内部に、あるいは、テキストとテキストのあいだに看取される、音、語句、構文などのくり返しが、人と人ならざる存在の「コミュニケーション」の成立およびその言語化にとってきわめて重要な役割をもつことを明らかにした。

本研究は、全6章からなる。以下、研究の概要と目的、方法論、そして論文の構成について述べた第1章に続く、第2章から第6章の内容をまとめていく。

第2章では、レトリック論の先行研究をまとめ、エコクリティシズムの概要について述べるとともに、エコクリティシズムの分野で環境文学の「レトリック」の問題を扱っている先行研究のレビューを行った。そして、テキストの表現形式に着目した従来の研究では、レトリック論や言語学などの言語研究の知見がほとんど参照されていないこと、また、この分野においては、「レトリック」という言葉は「修辞学」ではなく「弁論術（雄弁術）」を指す言葉として用いられることが多く、「環境文学のレトリック」が論じられる際には、テキストで用いられている〈あや〉（「文彩」、「フィギュール」）のもつ意味や機能ではなく、そのテキストのもつ「説得」という力について考察される傾向があることを明らかにした。

「反復」を手がかりに、環境文学テキストに描かれた人と人ならざる存在の「コミュニケーション」を読み解くことを試みる本研究が、従来のエコクリティシズムにおける「レトリック研究」とは一線を画すことを論じた上で、第3章では、第4章と第5章でテキスト分析を行う際に参照した理論的枠組みについてまとめた。まず、レトリック論の分野で「反復」がどのような〈あや〉と考えられているのかについてまとめ、次いで、ロマン・ヤコブソンによる「反復」をめぐる言語研究の鍵概念である「等価性」、「類像性」、「詩的機能」、「交話的機能」について、具体例を交えながら概説した。「等価性」と「類像性」に関する議論は、人と人ならざる存在の類似関係を読み解く際に、「詩的機能」と「交話的機能」に関する議論は、「反復」を伴いながら描き出される人と人ならざる存在の「コミュニケーション」を分析する際にそれぞれ参照した。とくに、詩的機能にはメッセージそのものに焦点化する機

能の他に、言及内容、送り手、受け手などを「多重化」させる効果ももつというヤコブソンの理論と、ハラルト・ヴァインリヒの時制論との親和性に着目した坂部恵の論稿を、テキスト分析をする上での重要な理論的基盤とした。

第4章では、第3章までにまとめた先行研究の知見を参照しつつ、梨木香歩の作品に描かれた、人と人ならざる存在とのあいだの「コミュニケーション」の場面で用いられている言葉ないし〈言葉〉を、①人ならざる存在から人への〈言葉〉、②人から人ならざる存在への言葉、③人が〈うたう〉(あるいは〈かたる〉)自然の〈言葉〉、の三種類に分類し、順に分析を行った。①②③が紡がれた梨木のテキストに、反復表現や、〈うた〉らしさを感じさせる表現が頻繁に用いられていることを明らかにするとともに、〈かたり〉や〈うた〉という言語行為が、人と自然や、人と超自然の存在のあいだで行われる「コミュニケーション」を特徴づけるという坂部の見解を参照し、以下の二点について論究した。まず、人ならざる存在から人に向けられた①の〈言葉〉と、人が人ならざる存在に向ける②の一部の言葉が、〈うた〉らしさを帯びることにより、当該の場面で行われている〈言葉〉あるいは言葉のやりとりが、人と人ならざる存在のあいだで行われる「垂直の言語行為」であるということを非明示的にも表していることを論じた。さらに、②の一部と③では、「反復」という〈かたち〉が、その「コミュニケーション」において「主体の二重化」という事態が起きていることを暗示していると解釈可能であることを示した。

第4章でテキスト内部の「反復」について論じたのに対し、石牟礼道子のテキストを取り上げた第5章では、テキスト間の「反復」、具体的には「他者」の言葉／〈言葉〉のくり返しに光を当て、分析を行った。その結果、次の三つの特徴が浮かび上がってきた。一つ目は、石牟礼のテキストでは、「他者」の言葉や〈言葉〉をくり返すことが、人と人とのあいだの、そして、人と人ならざる存在のあいだの「コミュニケーション」を成立させる鍵となっている場合があること。二つ目は、梨木のテキストと同じく石牟礼のテキストでも、人と人ならざる存在のあいだの「コミュニケーション」で用いられる言葉／〈言葉〉は、〈うた〉らしさを帯びる場合があること。そして三つ目は、「他者」の〈言葉〉の「反復」が、〈変身〉を引き起こす場合があること。以上の三点である。

さらに、第4章と第5章では、上述したテキスト分析の結果を環境文学研究で展開されている交感論の議論と接合し、坂部の言う「主体の二重化」と、交感論で言うところの「主／客を撚り合わせる」という事態とのあいだに通底する「他者観」が認められること、また、「反復」が、「人間の自然化」をはじめとする、「他者」を「他者」たらしめたまま交わるという「コミュニケーション」(「ポスト・ロマン主義的交感」)を描く修辞装置として機能することも解明した。加えて、「他者」の〈言葉〉をくり返すというふるまいが、エコクリティシズムが俎上に載せる、自然という「他者」との「想像的」な「相互行為」を立ち上げる上で要の役割を果たしうるということも論じた。

最終章に当たる第6章では、本研究の結論と今後の展望について述べた。

本研究では、梨木香歩と石牟礼道子の環境文学テキストを詳細に分析することで、「反復」

という形式的な〈あや〉が、単なる装飾や説得の具などではなく、人と人との「コミュニケーション」はもちろん、人と人ならざる存在のあいだにもさまざまな「コミュニケーション」を生起させるとともに、その「コミュニケーション」の性質や、メッセージの送り手と受け手の関係性を非明示的に示す役割を担っている場合があること、さらに、人が「他者」——他の人や人ならざる存在——の言葉／〈言葉〉を引用的にくり返したり、それを想像／創造して語るときに、発話の「主体」が「二重化」していると考えられることができるということを明らかにした。

本研究の学術的意義は、表現形式を手がかりとしながら文学テクストを読み解くという試みが、エコクリティシズムのみならず近年の文学研究においてもそれほど多く行われていないという状況のなかで、「反復」という表現形式に着目し、そうした分析手法が文学テクストを解釈する上できわめて有用な方法論となりうることを示した点にある。また、修辞学系のレトリック論や言語学の分野で、「意味」に関わる〈あや〉（メタファーやメトニミーなど）と比べて俎上に載せられることの少ない「反復」という形式的な〈あや〉に敢えて光を当て、それが人間の言語活動のなかでさまざまな役割を担うことを改めて示したところにも、本研究の意義がある。別言すれば、本研究を通して、文学テクストの「反復」に着目するという研究方法が、文学研究にとっても、言語研究にとっても、有益な知見をもたらす可能性を秘めていることが明らかになったと言える。

II. 論文審査の結果の要旨

(1) 論文の特徴

本論文の特筆すべき特徴は、以下の3点である。

1. 第一に、タイトルどおり、環境文学のレトリックを扱っている点が挙げられる。

レトリックないしは文体から環境文学を分析することはこれまでほぼ為されていない。その意味で、本論文のスタンスと、それを支える言語学的理論とその実践は今後、エコクリティシズムの世界で大きな意味を持つと考える。

エコクリティシズムは 1990 年代以降の新しい批評志向であり、理論的にも充分確定されたとはいえない。しかも、環境問題の接点という政治的・社会的志向性がもともと強いために、スコット・スロヴィック（アイダホ大学教授）のいう *environmentalist literature*（環境主義文学）に傾きがちな特性を本質的かつ歴史的に負っている。（山田論文の説得のレトリックに関する第2章参照。）

その結果として、それが文学であるということよりも、政治的インパクトがあるかどうか、あるいは政治的な意味のほうに重点が置かれやすい。その結果、場合によってはかなり安易な 1960 年代—70 年代に見られた政治プラス文学、場合によってはプロパガンダ的文学に陥りかねず、また批評の側がそれを相対化するどころか、それに積極的に（あるいは無意識に）加担する傾向さえある。

エコクリティシズムがこのように、理論的には未成熟でかつ政治的傾向に振り回されかねない状況の中、本論文は、環境文学が文学であり、言語芸術であるというもともと基本的な地点に立ち還り、まずはテキストを細密に読み、その構造を浮き彫りにするという従来のメインストリームとは異なる批評的スタンスをあえて選択したものと考えられる（課題と展望：p.202）。コンテキストへの目配りはなるほど必要だが、それがテキストへの注目を薄めたり、偏向させたりする場合もあることに留意すべきだし、政治満載の環境文学においては、むしろそれを脱色する志向も大きな意味を持つ。この姿勢を大いに評価したい。

2. 第二に、梨木香歩と石牟礼道子を対象としている点が挙げられる。

梨木香歩は児童文学的作家として位置づけられているせいか、これまで本格的な批評・分析がされていない。また、エコクリティシズム的な分析は数少ない。石牟礼道子はエコクリティシズム的な視点からの注目は 1990 年代後半あたりからあったが、まだ本格的なものは登場していない。

両作家とも、それぞれやや異なる意味でエコクリティシズムにとっての試金石である。梨木は、ナチュラリスト系の正統的ネイチャーライティングの書き手であり、個性的な小説家である点。とくにネイチャーライターとしての側面は、近年顕著になっているが、その作品の本質がナチュラリスト的である点、つまりたぶん近代自然科学系の知見を中心とする点。そして非政治的である点。

石牟礼は、これとは反対にいわば水俣病をめぐる政治的な問題の渦中にあり続けながら、梨木とある意味で正反対の非近代的で民俗的な社会と文化に深く根を下ろしている。つまり、本論文が対象とする二人の作家は、かなり相互に対照的な位置に立っており、容易に結びつくことはない。その二人がそのレトリックの問題を通じてきわめて近似的な地平に立つということを分析的に明らかにしたことは、じつのところ本論文の隠し味である。

この問題について本論文はかならずしも明確に意識化していない、あるいは直接的に言及していないが、今後、現代日本の環境文学＝ネイチャーライティングのスペクトラムを提示する上できわめて重要な示唆を与えている。さらにいえば、近代系と非近代系、ビート系と民俗系とでもいうべき二人の作家が、《反復⇒交感》的レトリックにおいて共通するものを図らずも内包しているとすれば、表の意匠の差異とは裏腹に、《反復⇒交感》原理の持続性がそこに示されているともいえる。

もう1点追加すれば、ここで展開されている石牟礼道子論は、これまで蓄積されてきた石牟礼論の方向性を大きく転換させるインパクトをもつことになるだろう。先述のように、従来の石牟礼論は、いわば石牟礼スクールに集うシンパによる「水俣病中心主義」的な傾向が強く、石牟礼文学の全体像を取り出すよりも前に、社会的なコンテキストで語られすぎてきた。何よりも文学としての価値を評定すべき批評・研究が、過度な政治化に曝され続けてきたといえる。

本博士審査論文はあえてこうした社会的コンテキストを無視して、垂直的にテキストに向かい、その言語の〈かたち〉を注視、分析し続けたものである。これが石牟礼論にとっていかに画期的であるかは、従来の研究の過半を一瞥するだけで明確である。本論文の「おもかさま」と「みっちゃん」の反復的なコミュニケーションが、石牟礼文学における根源的な関係の〈かたち〉であるとする指摘などは、これまで誰も解いていないきわめて独創的な視点であり、今後の石牟礼文学の批評に大きく貢献するものと考えられる。

ちなみに、批評家渡辺京二が述べている（第5章、p.195参照）ように、「石牟礼道子という文学的現象を分析し理解することは、それを思想的現象として理解するよりずっと大事だ」という視座の置き方は、石牟礼道子という日本のエコクリティシズムにとって逸することのできない作家を検討する場合の、いわば必須のかまえであり、著者は本博士学位審査論文でその点を明確に共有している。環境文学やエコクリティシズムはその本質と歴史的経緯からして「政治と文学」的な論議に巻き込まれやすいジャンルである。だからこそ、一方の極すなわち非政治的（＝反政治的）なアプローチが重要な意味をもつのである。

3. 第三に、〈交感論〉への大きな示唆が挙げられる。

本論文は、言語的な現象としての反復が、エコクリティシズムにおける論点のひとつである交感という問題と重なり合う、あるいはその一部を成す、場合によってはその指標となることを出発点として、〈交感論〉および交感という現象のメカニズムを新たな視点、それもかなりフォルマリスティックな視点で読み解いたことにより、〈交感論〉に大きな視点を加えたものである。さらにその上、変身を交感的現象としてとらえるということ、それ

も〈かたち〉＝〈あや〉というある言語形式の生成との鏡像的關係として生起するとする議論は、「反復⇒交感⇒変身」という生成メカニズムのその彼方に舞踊や儀礼などといった現象を視野に入れることを可能にする。また、坂部恵を媒介にした「主体の二重化」をめぐる議論が〈交感論〉に導入されることの意義は計り知れない。これによって、一方で舞踊や儀礼の問題に、他方で（単純な同一化論を超える）他者論をめぐる問題へと大きな展開を示すことになる。いうまでもなく、梨木香歩と石牟礼道子を同時に論じたことにより、いわば近代と非近代を接続させる〈交感論〉が可能となった点も重要である。

（２）論文の評価

「反復」を分析するにあたっては、何を単位に見るか、どこに反復があると解釈するか（等価性、類似性）を見極めることに加え、反復によって何がなされているかを知ることが重要なテーマとなる。この博士学位審査論文では、著者がまず文学テキストの読者として「反復」の力を自ら体験し（内在化）、さらにその体験を研究者として分析的に書くという行為（解釈学的言語化）によって、「反復」のもつ根源的力の深層にせまることに成功している。このような研究態度は、文体を単なる装飾にとらえず、テキストの力の体現（類像性-内容と形式、および形式と形式の呼応）をとらえることによって初めてなしえるものである。

著者は、従来のエコクリティシズムではほとんど取り上げられることのなかった修辞学的文体論を、「反復」という現象を中心に構築するにあたって、言語学、記号学、解釈学、哲学などの知見を十分な議論とともに導入し、環境文学作家の梨木香歩と石牟礼道子の作品中に描かれる自然（超自然）と人間との間のコミュニケーション場面の文体（表現形式）を具体例として引きながら、オリジナリティ溢れる考察を展開している。換言すれば、環境文学がかかげる「主客の撚り合わせ」というテーマを文体から論じるという挑戦に見事にこたえていると言える。

「反復」の分析が、テキストの内部構造のみならず、テキスト間に看取される修辞的關係性へと敷衍され、自然と人間とのコミュニケーションの言語化を論ずる際の重要な契機として論証されていることは、注目に値する。このように精緻な言語学的分析と文学的解釈を通して、「反復」ということばのあやの働きについて解明していく手法は、環境文学に限らず、今後小説（散文）のレトリックへと発展できることが示唆されており、本博士審査論文の方法論的貢献も大きく評価されるべきであろう。

本論文は、論文としての完成度が高く、学術書としての出版が期待される好著となっている。それは、論文構成および概念規定の緻密さと整合性、具体例を駆使しての議論の明快さ、事例分析にみられる洞察力と説得力、さらに各章に導入とまとめを配置し読者の円滑な思考の流れを確保する心くばり、などに如実にあらわれている。

今後の課題として、「反復」と密接にかかわりあい、特に「うた」や「まい」とも関連す

る問題としての「リズム」が挙げられる。それは、ことばの根源的力は恐らく鼓動のリズムという身体性に導かれ、「反復」という一種、抽象化され記号化されたさまざまな現象となって現前化するからであろう。是非、将来の一課題として文体論的考察を深めて欲しい。

細かい点ではあるが、「言語行為」、「発話行為」、「発語行為」という訳語について、原書における用語を確認し、説明を脚注などで行って欲しい。また、参考文献に見られる不備を補うことが求められる。